

THE EAVES 桐生川添のゲストハウス

A Riverside Guesthouse

山中 良子
YAMANAKA Ryoko

建築名	桐生川ゲストハウス	
設計	企画	山中良子 住吉剛彰
	実施設計	近藤裕之 山中新太郎
	インテリアデザイン	山中良子
	構造設計	森山孝治
	ライティングオブジェ	村田 稔
所在地	群馬県桐生市梅田町	
主体構造	木造 + 鉄骨造	
敷地	720m ²	
建築面積	121m ²	述床面積 180m ²

The Tonegawa river, the longest river in Japan, flows through the middle of the country. The upper stream of the Tonegawa, the Kiryuu river, is in a typical Japanese surroundings. We started designing a guest house in that area for an apparel company in the spring of 1992. The house will be used by people who work for the fashion business, established in the city, to relax and enjoy the natural surroundings. First of all, we studied the environment, type of land, condition of ground and species of plants that would relax and refresh people mentally and physically. Then, we examined the area in detail. The following points were to be considered in particular in designing the house.

- The house and the area should be well balanced in nature without destroying the environment.
- People's movement and their eye movement in approaching the house should be smooth.
- Provision of a comfortable interior by making use of natural light and ventilation.

1. プロローグ

わが国の環境破壊は2000年以上前、弥生時代に端を発しているという。稲作の為に森林を伐採し、定住する為に木を切り、燃料のために木材を燃やすといった生活様式を以来ずっと続けてきた。それでも日本の気候風土は温暖で、年間を通して降雨量も多く、樹木を絶えること無く新生し、いまだに世界でも有数の森林国である。しかし、人口増加と全国的な都市化現象により、いまや一人当りの森林面積は最低水準となってしまった。

環境破壊に対する地球規模の反省の中で、日本人もようやくあまりにも恵まれすぎていた自然の恩恵に対する再認識と、それを失いつつあることへの恐怖を実感しはじめている。しかし、あまりにも広がりすぎた弊害に対し、解決策を見出すのはなかなか困難で、はるかにさかのぼって縄文期の自然との共存による輪廻転生の生き方にその糸口を見出そうとする人々すら出ている。ともあれエコロジカルな生活を実践すると共に、各自それぞれがたずさわる分野において、思い付く方法を一つ一つ実施していくことであろうか。

では、生活環境のデザインにかかわる人間は環境の良質化の為に何をなすべきか。

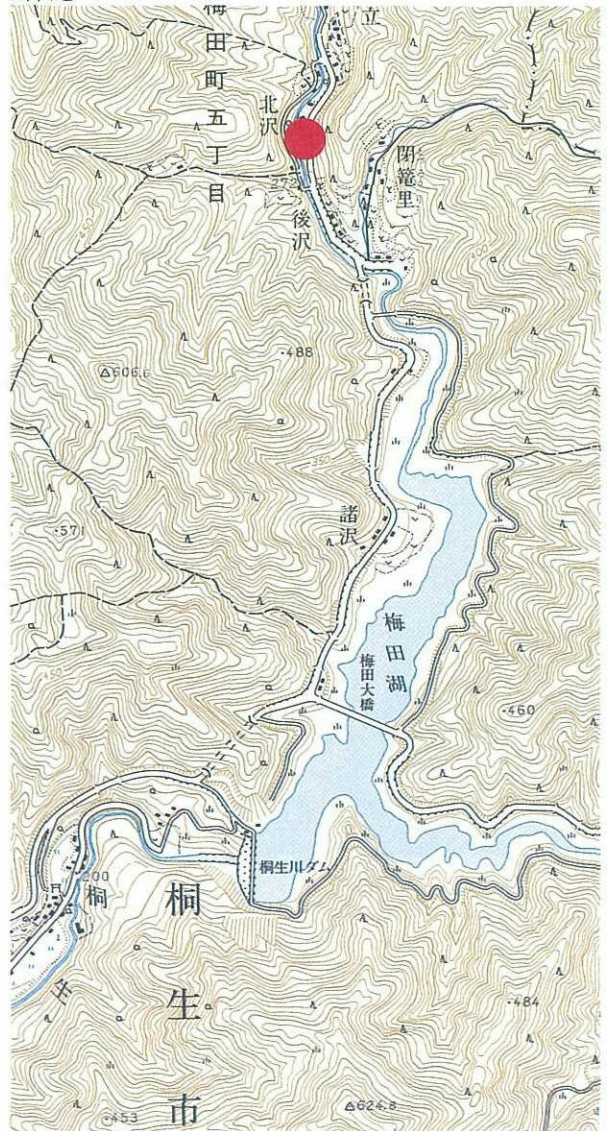
まず気付く事は、我々デザイナーがあまりに個々の姿、形と直接的な機能にこだわりすぎて来たということである。こうした問題意識のもとにデザインをした事例を以下に提示する。

桐生川は日本地図のほぼ中央に位置し、日本最大の河川である利根川の上流であり、赤城山と足尾山の山間を流れている。変化に富んだ地形ゆえに急流になり水は澄み自然の曲線を描き、所々美しい砂州をつくるといった日本の河川でしか見られない特色を建設用地前の川も呈している。

又、このあたりは東北日本の冷温帯落葉広葉樹林帯(ブナ、コナラ、クリなど)と西南日本の暖温帯常緑広葉樹林帯(シイ、カシ、クスなど)との間にあり、広葉樹林、針葉樹林、竹が混生している。気温は夏は低いが、冬はあまり寒くならない。こうした日本の集約的な気候風土の土地を背景にした地域に、桐生市内にある布地加工メーカーが取引先である都心のファッションビジネ

スを招き、自然との語らいのなかで心身共にリフレッシュしてもらおうという構想で計画をすすめた。しかし川に面した山間の地ははじめじめと湿気ており、北面が川であり、南面は高い崖になっていて寒々としていた。この様な状況の土地で、景観をなるべく阻害せずしかも居住性がよくなるようにまずランドスケープデザインを行い、上記の悪条件を好条件に導いていった。その上で、すばらしい自然の中になにげなく庇をかけたように存在する建物を計画した。ただし、都心で仕事をしている人々が日常的な感覚で受止められる形態、色は何かと考えていくと、“自然”に感じる物はかならずしも“100%天然の自然”ではないのではないかという考えに到達する。また建物が周囲の景観に対し新鮮な風貌を呈してこの土地と人間との接点となるようにと考慮した。

所在地

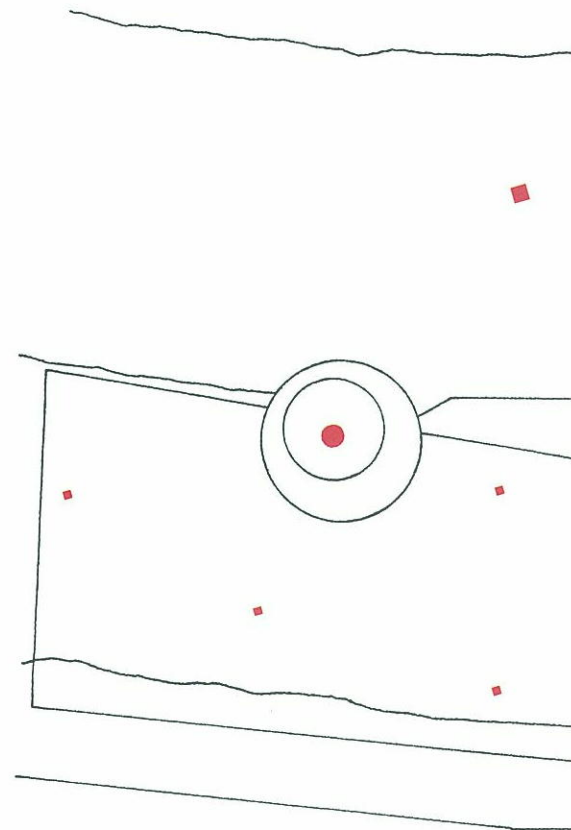


2. エンバイロメント

現代人はあるがままの自然にふれその景観を楽しむために旅にでるのを最大の楽しみとしている。かつて東洋では“神のやどる自然”として特に森や樹に神聖を感受していた。今日も別の意味で自然に対する信奉は続いていると言える。こうした精神的な影響の裏付けとして生理的にも森の効用は分析されている。適度の湿度をおびた空気、木洩れ日のやわらかい光、草木の香などが五感に快く、精神を安定させること、樹木や草花等が自然の法則のもとに美しい形態と色調を呈しており、

特に緑色は可視光線の中でもっとも良く見える色すなわち目にやさしい色だということである。又平均気温表にも見られる通り森は砂漠地帯と異なり樹に守られて、冬は気温が下がらず夏は上がり過ぎず温かな状態が保たれる。その上樹から発するテルペンを主体とした化学物質に殺菌力があり健康によいこともあげられる。大きく環境問題を考えれば、森の貯水力は人工のダム10倍に値する点、植物が光合成でとり入れられた炭素の収支バランスを保ち、地球の気温安定がはかられている点などその恩恵の大きさは計り知れない。我々は一本でも多くの木を後世に残したいと念ずるのみである。

月別平均値 (1961~1990)	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	全年平均値
平均気温	2.8	3.3	6.5	12.6	17.6	20.9	24.4	25.9	21.5	15.6	10.3	5.5	13.9 91位
平均降水量	21.1	34.1	49.9	77.1	93.4	169.9	172.8	171.8	183.4	93.8	45.0	17.9	1130.4 139位
全国平均量 平均気温	3.4	3.7	6.8	12.2	16.6	20.1	23.9	25.2	21.6	16.1	10.9	6.0	13.9
平均降水量	93.2	89.8	113.4	138.8	153.4	214.7	193.1	173.7	202.5	140.8	114.6	88.9	1717.2

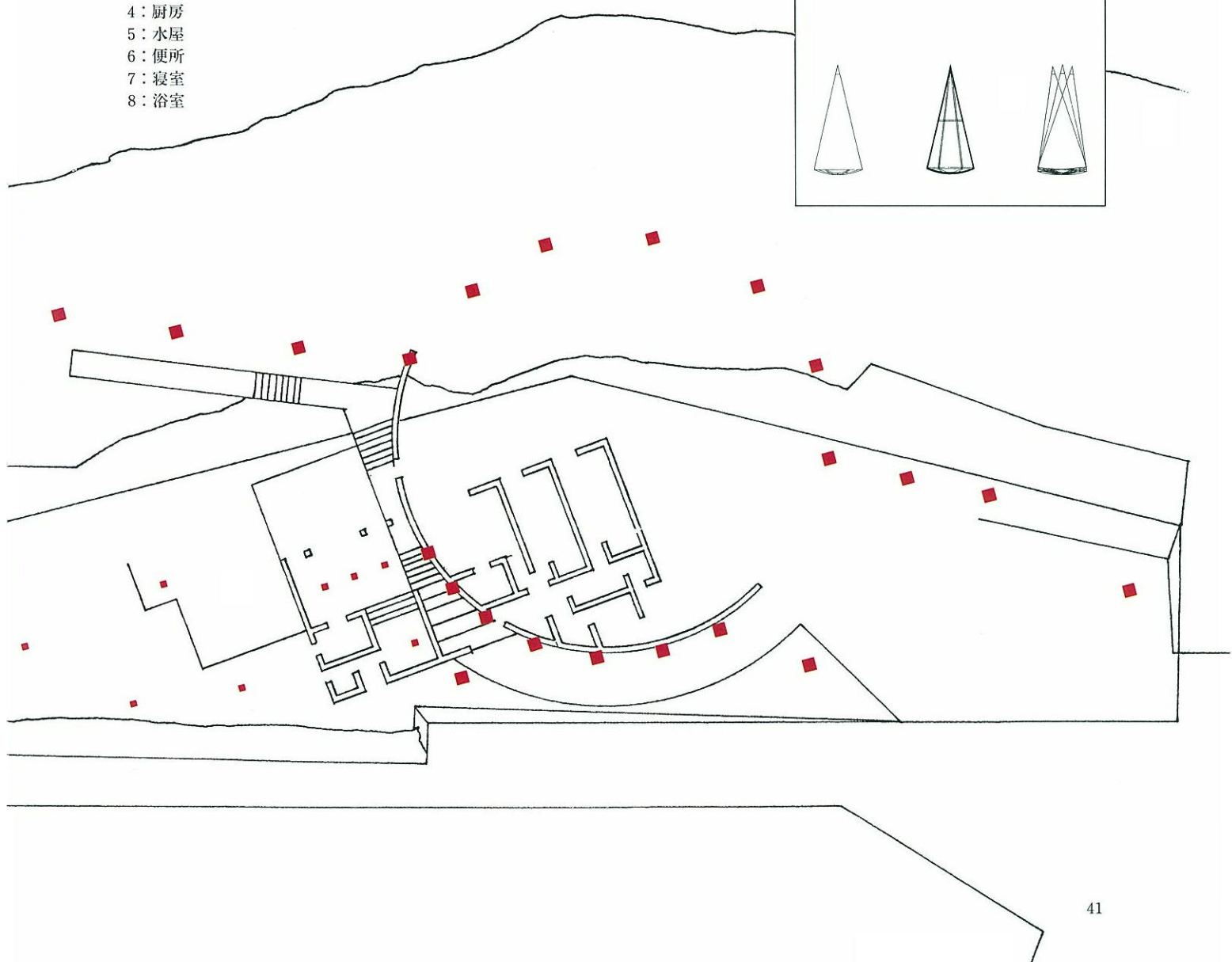
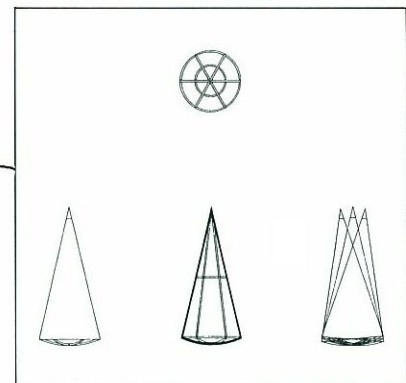
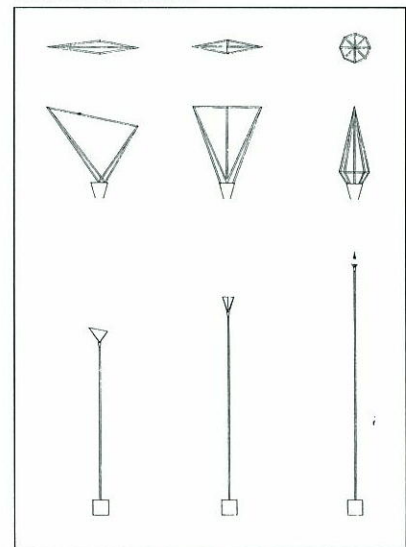


3. サイトプラン

樹木を出来るだけ残し、ダークグレーの淡い色調の石が散在する河原と美しいカーブの川の流れにはなるべく手を入れずに、そのよどみに生育する鮎を釣る為の棧橋をだす。東面駐車場の川の流れが合流するコーナーだけは斜面も急で危険なため人工的な護岸工事を行う。他は南面の道路から自然の地形に沿って川までのランドスケープデザインをする。アプローチから竹林をぬけて川を下りる道、アプローチから家に入り川辺に出て外湯に向う道など、回遊するままに光の軌跡を図(赤点)のように点灯してこのすばらしい環境をアニメティとアクティビティーの両面から積極的に追求した。

- 1: エントランス
- 2: ホール
- 3: アルコーブ
- 4: 厨房
- 5: 水屋
- 6: 便所
- 7: 寝室
- 8: 浴室

LIGHTING OBJET



4. ジェネラルビュー

古来人間の生活と自然の関わり方は、その地の気候風土に合わせてヨーロッパの様に自然を人為的な秩序のもとに形成してしまう地域(フランス他の庭園等)や中近東アフリカ等では自然に対し防御の姿勢で外界とはっきり断絶し、内部に別世界を造る地域等様々であった。

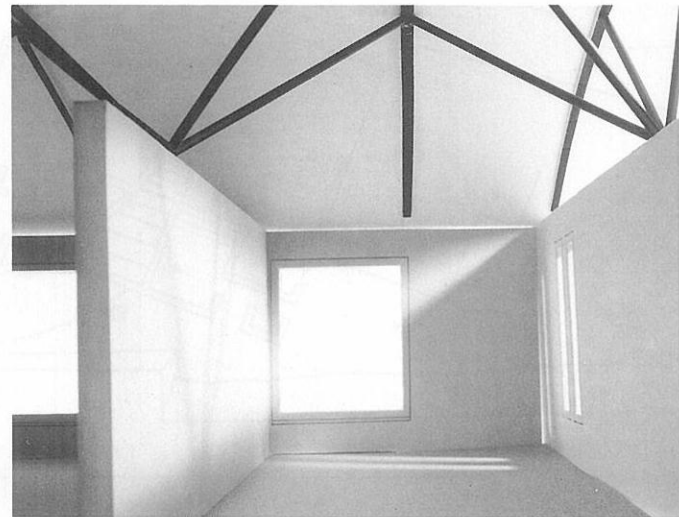
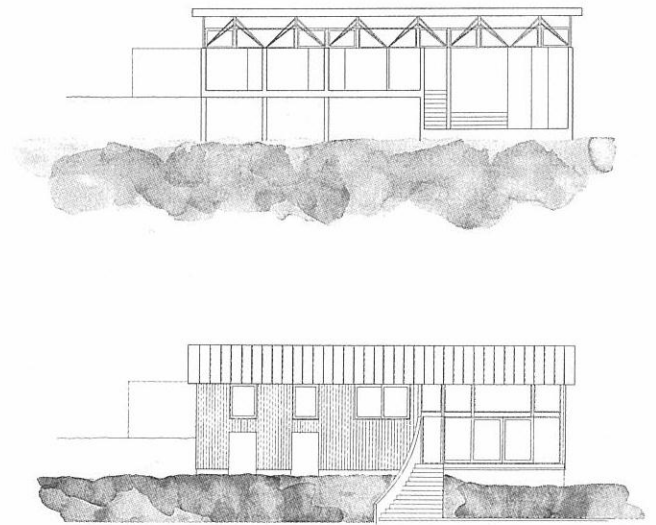
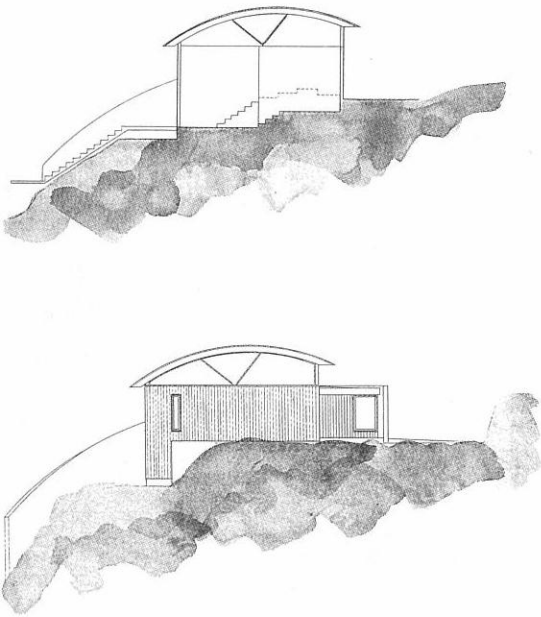
温暖で湿気の多い日本では通風の為外に向けて開放させると同時に、四季の変化を居ながらにして味わい、家のしつらえや衣服まで季節に合わせて楽しむという自然と共存する生活感を持っていた。現在室内のエア-

コンディションもコントロール出来るようになり、建築資材も工法も多種多様で建物の形態も変わって来ている。しかしこうした生活意識はぜひ残したいと思う。

この川沿いのゲストハウスでは今日的材料工法でこうした生活様式を最大限実現させる試みをした。

川からの風を意識して屋根は柔らかいカーブを描き、変化に富んだ風景の中にさり気なく庇を出した様な存在の建て物にする。

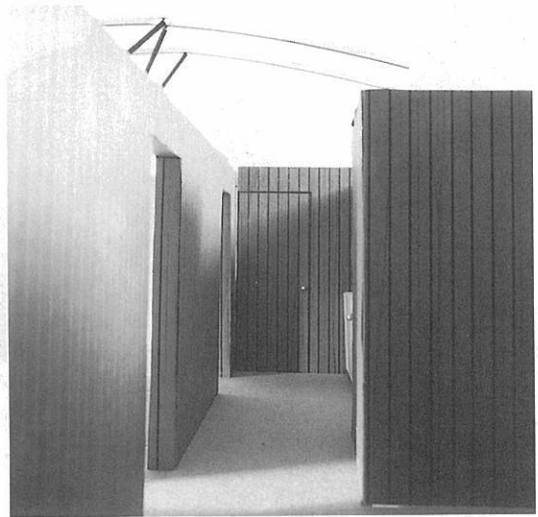
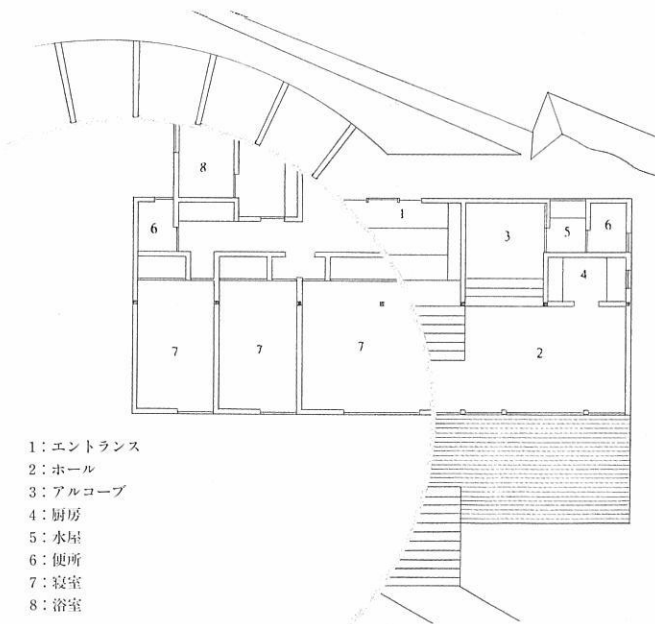
川に面した北側は高床にして湿気をのがしており、居間と同じサイズのテラスをそれに続けて張り出し、外に向けて空間イメージを広げる。夏テラスから入る風は



南面高窓にぬけ、冬はその高窓を通して日の光が入る(写真参照)。鉄骨の立体トラスの剛性により木造ながら大スパンの空間を確保できると共にこの構造体が内外装材の米松とコントラストして今日的な建築の意匠として自然に受け止められる事を志向した。

5. インテリア

平面プランのR壁を境に左手プライベートゾーンは巢の様に閉鎖的な空間にして、右手パブリックゾーンはアプローチから玄関居間テラス庭へと濃なく動線が得られる様に考慮した。春から秋にかけてのリゾート用として企画されたので、北の川に向かって開放してある。東、南、西各面は上部から大きく採光を取り入れて居住性を上げ同時に山の景観を満喫出来るようにした。解放感を優先し、全室梁から上は仕切らずワンルーム扱いで暖房器を配置した。



6. カラースキーム

ゲストがファッション関連の仕事を離れて寛げる様に、ニュートラルで普遍性のある色調でまとめて素材感を強調し、鉄骨の色は太陽の光、空の色、森の緑にとけ込むイエローを選び全体のコーディネートで新鮮に感じられる様に志向した。居間の一段高くなるコアにインドネシア産の大小ミックスしたクッションを配し、下段のイステーブルの人々と視線を合わせ。両サイドの梁に沿って間接照明を入れて、中央に外灯の流れに合わせて点灯を連ねる等、四方から自然光の入る昼間のスペースと照明による夜の雰囲気の変化を楽しめる様に計画した。



大型クッション



洗面器水洗金具



鉄骨カラー



内装用木材



カーペット



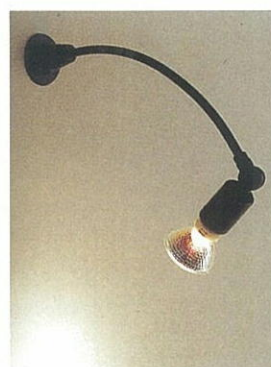
R壁仕上材



ベッドカバー



外装用木材



照明



テーブル



参考文献

- 1) 只木良也(1988)『森と人間の文化史』, NHKブックス
- 2) 須賀克三(1992)『川の個性』, 鹿島出版社
- 3) 足田輝一(1985)『樹の文化誌』, 朝日選書
- 4) 和辻哲朗(1979)『風土』, 岩波文庫
- 5) 品田穰(1980)『ヒトと緑の空間』, 東海大学出版会
- 6) 平凡社(1987)『日本の自然—日本の風土』